

国民国家の夾雑物について考える：屋嘉宗彦先生への連帯表明として

内田, 俊一 / Uchida, Shunichi

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

114

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

31

(終了ページ / End Page)

35

(発行年 / Year)

2017-03-22

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00014679>

国民国家の夾雑物について考える

——屋嘉宗彦先生への連帯表明として——

内田 俊 一

私事にわたることをお許し願いたい。筆者は一九四九年（昭和二十四年）生まれで、群馬のような田舎でも同級生に米兵と日本人女性の間で生まれた「混血」（当時はそんな言葉が使われていた）の子がいた世代である。彼女は母子寮（今は母子生活支援施設と名前が代わり、当時とはかなり性格が変化しているらしいが）に暮らしており、中学に上がるときに（その田舎の小学校ではほぼ全員がそのまま同一の学区の中学校に持ちあがったのだが）、彼女の姿は消えていた。

どこへ行ったのか、筆者は何も知らない。日本は、異質と見なされた人びとに対して優しい社会ではない。そのまま中学に上がってれば、おそらくいじめの対象になっただろう。あるいは私が知らないだけで、それまでもそのような出来事があった可能性もある。だから、沢田美喜が創設したエリザベス・サンダース・ホームのような、そのような境遇の子供たちを収容する児童養護施設に移ったのかもしれないし、もしかすると彼女のような容姿の子供が珍しい存在ではないアメリカに移住したのかもしれない。アメリカに行ったとしても、父親に受け入れられたわけではないだろうが。

二十年ほど前に、その小・中学校の卒業後初の同窓会が開かれた。筆者はできることならその「混血」の彼女に会ってみたいと思っていた。(もちろんそれは不可能だろうとも内心思っていたが。)しかし実際に同窓会に出席して私に驚いたのは、彼女のことを憶えている人間がびっくりするほど少ないことだった。確かに彼女は小学校を卒業しただけで、中学校はどこかに転校してしまっただから、卒業生名簿にも名はなかった。しかし彼女の「日本人離れした」容姿——朝礼で全校生徒が校庭に整列すると彼女の頭は頭一つ突き抜けていたし、金髪碧眼だった——からすれば、とても忘れることのできない存在だったと思うのだが。

つまりこれが「ナシヨナリズム」というものなのだと思ふ。いつも知れぬ太古の昔から純粹な「日本人」という血筋が連綿と流れ続けて現代にいたるといふ妄想。(その妄想によれば「純粹」な血だけが正統なものであって、「混血」といふ呼び方自体がすでに内包しているように、それは一種の事故のような、本来あってはならない非正統的な存在ということになるのだろう。)その虚構の邪魔になる夾雑物は、まるで最初から存在していなかったかのように記憶から消し去る心的規制。エルネスト・ルナンは、国民の創出にとつては(ナシヨナリズムにとつては、)言い換えても良いだろう)共通の記憶だけでなく、共通の忘却も必要だと喝破した(一八八二年の講演「国民とは何か」)が、それはこのような心的規制を指しているのだろう。

かつて日本は台湾や朝鮮の人びとのような「非正統的」日本人と見なされる人々を数多く抱えていた。敗戦によってそれらの人びとを失った結果、日本のナシヨナリズムは小さく凝固し、むしろかえって強化されたと言えるのかもしれない。(野党党首の二重国籍問題を攻撃してやまない政治家やマスコミは、彼女の父親の一族もかつては、日本の国家権力によって強制的に日本人——非正統的ではあっても——とされていたという事実を故意に無視している。)あとは、敗戦とアメリカによる占領という一種の事故から生み出されてしまった、筆者の同級生のような「混血」児

をなかつたことにしてしまえば、問題は解決したことになるのだろうか。

しかしそううまく事は運ばない。と言うよりも、ナシヨナリズムは内部に排除の対象とされる夾雑物を含んでいる方が、かえって強力に機能する。だから、夾雑物たる非正統的日本人は、ある意味必要な存在なのである。そのようにして今必要とされている非正統的日本人の代表は沖繩の人びとだろう。

非正統的日本人としての琉球人の歴史は古い。明・清両王朝を通じて中国への冊封・朝貢関係を持ち続けた琉球王国に対して、一六〇九年薩摩藩島津氏は三千の兵を送って征服し支配下に置く。しかし大陸の大国の力を恐れた日本は、琉球の薩摩への従属関係を隠蔽し、中国側との関係を壊さないように冊封・朝貢関係を維持させたので、日本と中国の両方から支配を受け、双方にまたがる属国という奇妙な存在が生まれることになった。たとえば琉球使節団が江戸へ上るときには、わざわざ中国風の装束をまとわせて東海道を練り歩かせ、「日本の中の異国」が強調された。沖繩の米軍北部訓練場へのヘリパット建設を警護する本土出身の警察官の、反対派市民に対する「土人」や「シナ人」といった暴言は、琉球人に対するそのような視線が、現代にいたるまでいかに強固に根付いているかを証している。

その後琉球は、アヘン戦争を契機としてヨーロッパ列強に半植民地化された清の衰退の隙をついた明治政府の「琉球処分」（一八七九）によって、強制的に日本に統合され、沖縄県として日本の版図に組み込まれる。しかし事はこれで終わらない。第二次世界大戦末期に琉球列島各地に侵攻し占領した米軍は、奄美群島以南の南西諸島地域における日本の行政権を停止し、琉球列島米軍政府を設立して琉球の統治にあたる。琉球列島米軍政府は後に琉球列島米国民政府と改称（ただしその長である高等弁務官は歴代米国の陸軍軍人だった）され、その下に琉球人による琉球政府が置かれたが、その長である行政主席は、初期には米国民政府によって直接任命されるなど、米軍による間接統

治の色彩の濃いものだった。ただし、琉球を恒久的に保持し続けるかどうかについてのアメリカ政府内の意見の分裂もあって、日本が琉球列島に対して潜在的な主権を主張しうる余地が残される。かくて、かつての中国と日本への二重所属のような状況が再び繰り返されることになった。

屋嘉先生は、米軍統治下の沖縄で高校までを過ごし、その後本土の大学および大学院で学ばれたわけだが、その時にはパスポートを所持して日本本土に渡航してきたのだと、以前にご本人から伺ったことがある。(この琉球列島米国民政府発行のパスポートによる日本本土入域の際には、日本の入国監理局は「帰国」のスタンプをパスポートに押したらしい。これはささやかな抵抗の表現と言え言えるかもしれないが、かつての琉球王国時代に、超大国の力を恐れてあえて琉球に二重所属の状態を維持させた薩摩藩および徳川幕府のやり口を、どこことなく思い出させるものもある。)

一九七二年の本土「復帰」を経ても、沖縄の置かれた二重所属の状況は、本質的な部分では何も変化していないように思われる。日本全体の一%以下の面積しか持たない沖縄県が、在日米軍基地の七四%(県面積全体の一一%にあたる)を抱え込まされ、日本本土の政府に公平な負担を求めて、基地の本土移設を要求するのは、当然と言えばあまりにも当然なことだが、本土側は結局一向に動こうとはしない。近年、たとえばイギリスのスコットランドやスペインのカタルーニャのように、現在所属する国民国家からの分離独立を求める動きが世界中に広がっているが、所属国民国家から受けている差別の酷さという点で言えば、まず真っ先に沖縄こそ、そのような運動を起こす権利があると考えるだろう。

屋嘉先生は近著『沖縄自立の経済学』(二〇一六年三月 七つ森書館)において、沖縄独立をも射程に収めつつ沖縄経済の自立の方途について論じておられる。沖縄経済の現状確認から始め、その現状のいびつさを生み出した大き

な原因の一つである日本政府の沖縄経済振興策が詳しく取り上げられ、さらにはこの沖縄振興計画が「戦後日本経済の矛盾を糊塗するために策定され、失敗した全国総合開発計画と連動して」いた次第が明らかにされる。そして沖縄経済自立のためには、いかなる産業に重点を置き、いかなる施策を取るべきかについて詳細に論じられ、最後に「沖縄経済の完全な自立化がなまかなことではなく、長期的展望・目標として設定されるべきもの」であり、「上からの政策だけでなくそこに向かって住民が意識的に努力しなければならぬ」という提言がなされる。沖縄の政治的独立を情緒的に訴えるのではなく、一つ一つ着実に現状を吟味しながら、経済的自立の、ひいては政治的独立の、可能性を探った労作である。

筆者は、ヨーロッパの諸々の国民国家の代表的夾雑物であったユダヤ人に長く惹かれ、関心を寄せ続けてきた。そのような者として、自立（独立）への志向を保持し続けようとする屋嘉先生の姿勢に、心からの敬意と賛意を表したいと思う。しかし同時に、第二次世界大戦後遅ればせの国民国家として成立したイスラエル共和国が、その国家の内部に新たな夾雑物を生み出してしまい、その夾雑物を梃子として自らのナシヨナリズムを強化している現状に目をやれば、かりに琉球（沖縄）が新たな国民国家を形成し、日本国から独立した場合でも、そのような陥穽に陥ることのないような方策を、是非とも考えておいていただけのように希望したい。現在地球上に存在する全ての国民国家が、その内部に夾雑物を抱え、それこそが国民国家に特有の構造とも思える現状であるだけに、もしもそのような方策が可能であるならば、世界の国民国家体制を乗り越える端緒ともなるだろう。

（この一文が『屋嘉示彦教授定年退職記念号』に載せるにふさわしいものかどうか、正直筆者には自信がない。ともあれ、これが屋嘉先生への連帯表明であると受け取っていただければ、筆者としては幸いである。）